

# 成果報告書

記入日 2015 年 8 月 31 日

氏名 土佐林 慶太	渡航先国名 インドネシア	所属機関 ガジャマダ大学
研究テーマ：20 世紀前半ジャワにおけるイスラーム諸団体の連携と対植民地政府活動 － イスラーム連合体ミアイ、マシュミを中心に－		
研究期間：2013 年 7 月～2015 年 7 月		
<p>研究成果（概要）</p> <p>報告者は、各地の図書館・文書館での文献調査を通して、博士論文執筆のために必要となる資料の調査・収集を行った。また、現地の大学院生や研究者との交流を深めることで、自身の研究についての新たな視点や方向性を見つけることができた。</p>		
<p>研究成果（詳細）</p> <p>— 【はじめに】 —</p> <p>報告者は、ジョグジャカルタのガジャマダ大学にリサーチフェローとして所属し、主にジョグジャカルタとジャカルタの 2 都市で留学生活を送った。本報告書では、まず、【研究テーマの概要】にて、本研究の 3 つ着眼点と研究目的・方法について、説明する。次に、【研究（調査）活動とその成果】にて、留学中の調査活動の内容を記した後、そこから得られた具体的な成果について、上記 3 つの着眼点に沿って述べる。最後に、【総括と今後の課題】を記す。</p> <p>— 【研究テーマの概要】 —</p> <p>報告者は、20 世紀前半、とりわけ 1920 年代から 40 年代における、ジャワ・ムスリムの連携活動に関心を持ち、ミアイ（Madjlis Islam A' laa Indonesia, M. I. A. I. / インドネシア・イスラーム最高評議会）と、その後続組織であるマシュミ（Madjlis Sjoero Moeslimin Indonesia, Masjoemi / インドネシア・ムスリム協議会）というジャワで設立されたムスリム連合組織を主要な研究対象としている。本奨学金の申請書類では、以下の 3 点に着目することを述べた。即ち、(1)1922 年から 1932 年まで開催されたイスラーム会議、(2)イスラーム会議の終了から、1937 年 9 月にミアイが設立されるまでの活動、(3)1937 年に連合組織として設立されたミアイとマシュミの設立過程とその活動、の 3 点である。</p> <p>本研究の目的は、オランダ植民地期末期と日本軍政期における、ムスリムの連携活動に焦点を当て、その歴史的変遷を明らかにすることである。この直後にインドネシアは独立し、マシュミは政治政党として、ムスリムが政治の舞台に参加する基盤となった。こうした時代背景を考慮すれば、本研究の目的は、独立後のインドネシア社会におけるムスリムの地位や役割を考察する上でも、意義があると思われる。研究手法としては、歴史学の立場から、20 世紀前半に同地で発行された、インドネシア語、ジャワ語、オランダ語の一次資料を取り扱う。当時、新聞・雑誌などの定期刊行物や著作物が各地で出版され、オランダや日本の植民地政府による公的文書や植民地政策に関わった者が記した記録なども多く残され</p>		

ている。それらを計画的且つ網羅的に調査・収集していくことが、本留学の最大の目的であった。

### — 【研究（調査）活動とその成果】 —

留学中の文献調査で、最も多くの成果を得たのは、インドネシア国立図書館（Perpustakaan Nasional Republik Indonesia）であった。同図書館は、基本的に閉架式となっており、オンライン蔵書目録（OPAC）も導入されている。しかし、それも完璧とは言えず、適宜紙媒体の蔵書目録（カタログ）と合わせて確認する必要がある。また、紙媒体のそれも複数の版が存在し、その版により記載漏れや、インドネシア語表記の不統一（当時の表記通り旧綴りを採用するものと、現在用いられている新綴りを採用するものの混入）が見受けられる。同図書館の調査において、報告者が最も苦労したことは、蔵書目録に記載されているにもかかわらず、その書物が「ない」と言われる時であった。修復中なのか、紛失したのか、整理中なのかもわからず、ただ呆然とした。しかし、別の機会に尋ねてみると、その文献が出てくることもあり、一度「ない」と言われても、機会を改めて何度も尋ねてみるのが重要であった。また、これは同図書館に限ったことではないが、司書の方々との信頼関係を築くことも、文献調査において非常に大切なことだと改めて感じた。日々の会話を通して、自身の研究テーマや関心事を知ってもらうことで、司書の方々から、今まで知らなかった関連文献を提示してもらうことも多かった。

前置きが長くなったが、同図書館で、報告者が最初に取り組んだことは、同地で出版された、雑誌・新聞といった定期刊行物の調査・収集である。イスラーム会議や、ミアイ、マシュミといった連携活動には、多くのイスラーム組織が参加していた。ミアイには、最終的に 20 以上のイスラーム組織が参加している。1943 年以降は、ミアイとマシュミの両組織の機関誌が発行されるが、それ以前については、1937 年から 1942 年までの 5 年間の活動記録をまとめた『ミアイの記憶』という回想録が一冊出版されているのみである。従来のミアイ、マシュミ研究は、この回想録と 1943 年以降に発行された機関紙を、情報の大きな拠り所としているため、事実誤認や情報不足によりその分析にも疑問が残る。以上のような研究状況を踏まえ、本研究では、各組織がそれぞれどのような意図を持ち、こうした連携活動に参加していたのか、あるいは参加しなかったのかということを念頭に置き、可能な限り多くの同時代の定期刊行物の調査・収集に取り組んだ。定期刊行物の中で、雑誌資料については、これまでの現地調査でもある程度確認をしてきたが、新聞資料については、これまであまり力を入れてこなかった。今回の調査では、新聞資料の調査・収集に多くの時間を割いた。そうして得た新聞記事は、この留学最大の成果と言える。こうした作業と並行して、各種報告書や、当時刊行された関連書物の収集にも取り組んだ。しかし、植民地政府が発行した公的文書については、時間の関係で十分な調査を実施することができなかった。この点は今後の課題である。

国立図書館以外にも、ナフダトゥル・ウラマー本部（ジャカルタ）、ムハマディヤ本部、ジョグジャカルタ公立図書館、王宮図書館、パクアラマン文書館（以上、ジョグジャカルタ）などで、同様の文献調査を行った。さらに、所属のガジャマダ大学の他に、イスラーム大学（ジャカルタ校、ジョグジャカルタ校）、ムハマディヤ大学（ジョグジャカルタ校）などでも、文献調査を実施した。大学での調査は、研究書や論文などの二次資料の調査・収集を中心に行った。こうした二次資料についても、現地にいるからこそ手に入ったものも少なくない。さらに、留学を通して、新書店や古書店で多くの文献を購入した。

上記の 2 都市以外では、短期間であったが東部ジャワのスラバヤを訪れ、ムダユ・アグン図書館で同様の文献調査を行った。スラバヤは、当時のイスラーム運動の要所であり、ミアイの設立を決め、最初の本

部が置かれた場所でもある。ミアイ設立時の4人の中心メンバーの内、3人が関わっていた Taswirul Afkar という施設を訪れ、色々とお話を聞かせいただき、研究のヒントを得ることができた。

以下、これまで述べてきた研究活動で得た資料を基に、その成果について、【研究概要】に記した3つの着眼点に沿って簡潔に記す。

(1)1922年から1932年まで開催されたイスラーム会議について、イスラーム会議の活動を分析する中で、ミアイの理念との共通点を見出すことができた。具体的には、両活動においても、国内ムスリムの連携ということが叫ばれる一方、その視線は海外ムスリムとの連携ということも常に見据えられ、大きな関心が払われていたことである。

(2)イスラーム会議の終了から、1937年9月にミアイが設立されるまでの活動については、現在資料を精読中である。現在の段階で言えることは、少なくとも、1936年末頃には、マス・マンスールとアフマド・ダフランの中に、ミアイのようなイスラーム連合組織設立の構想があり、彼らにアブドゥル・ワハブ・ハズブラを加えた3名が中心となって、イスラーム最高評議会 (Majlis Islam Tinggi) という組織の設立を目指していたことが、資料から明らかになった。このイスラーム最高評議会が、ミアイ設立の基になっていたと考えられる。

(3)1937年に連合組織として設立されたミアイとマシュミの設立過程とその活動については、ミアイの組織変遷に関する考察から、ミアイ執行部が設立時に想定していた程の協力を各イスラーム組織から得られず、徐々にそれを得ていく過程が、本調査の資料から浮き彫りになった。これらの詳細については、『ミアイ (Majlis Islam A' laa Indonesia, M. I. A. I.) の設立過程とその初期組織変遷 1937-1939』『史滴』35号の中で、詳細な記述を行っている。

また、こうした考察を行う中で、新たな視点も生まれた。これまでの研究では、イスラーム会議やミアイなどのムスリムの連携活動を考察する時に、改革派と伝統派、もしくは各イスラーム組織間の関係といった、前提にある大きな枠組みに目を奪われ過ぎるあまり、その中で活動をする、個人に注目する視点が欠けていた気がする。こうした枠組みを考慮しながらも、そこで実際に活動するウラマーやイスラーム指導者の、よりパーソナル人間関係や思想に着目する必要性を感じるようになった。上記のイスラーム最高評議会やミアイの設立で言えば、マス・マンスール、アフマド・ダフラン、アブドゥル・ワハブ・ハズブラの3人が結びついた背景には、どのような人間関係があり、それらの設立に向けて行動を共にするようになったのか、ということである。それが、スラバヤを中心とした地縁的な結びつきで生まれたのか、Taswirul Afkar での活動を通して生まれたのか、彼らが受けた教育の場を通して生まれたのか、色々な可能性が考えられる。今後は、まず手始めに、マス・マンスールに焦点を当て、彼の思想や人間関係を探る中で、ムスリムの連携活動を再考していきたいと考える。

#### — 【総括と今後の課題】 —

2年間に亘る留学生活は、上記の通り、資料収集の面で、非常に実り多いものであった。特に、新聞資料の収集は、留学出発前に想定していた以上の成果があった。しかし、植民地政府の公的文書など、現在も不足している資料がある。報告者は、それらの調査・収集のため、助成終了後の2015年8月以降も、現地に滞在し、調査活動を続けている。今後は、これらの不足している資料の収集と、これまでに集めた資料の精読、分析を続けながら、博士論文の完成を目指していきたい。

## 留学中の生活・研究でのトピックス

研究成果でも記した通り、この2年間は、所属のガジャマダ大学があるジョグジャカルタと、国立図書館がある首都ジャカルタの2都市が、報告者の主な滞在先であった。ジョグジャカルタとジャカルタは、同じインドネシアでも、街の雰囲気が大きく違う。また、報告者の滞在目的もジョグジャカルタとジャカルタでは、異なるものだった。

ジョグジャカルタは、多くの大学が集う学生街で、良くも悪くも、のんびりとした雰囲気の街だ。ここでも、ジャカルタと同様、資料の調査・収集とその精読が報告者の日々の活動であったが、それと同時に、所属するガジャマダ大学の授業を聴講することや、歴史やその他の学問を学ぶ大学院生と交流することも、この街での大きな目的のひとつであった。彼らとの何気ない会話から、研究のヒントをもらうことや、研究に対するモチベーションを刺激されることも多々あった。そうした研究仲間とも言える友人に多く出会えたことは、自身の留学生生活を振り返ってみて、とても幸運なことだったと思う。

留学生生活最後の半年間は、ほぼジャカルタに滞在し、国立図書館での文献調査を集中的に行った。報告者にとってジャカルタ滞在は、図書館での資料調査及び収集が、最大にして唯一の目的であった。また、ジャカルタの日常的な交通渋滞を考えると、図書館閉館後に外出しようという気力もなくなり、図書館と滞在先を往復する日々が続いた。そうした生活の中でも、ガジャマダ大学の友人たちが、報告者同様、文献調査のためにジャカルタを訪れ、図書館の帰りに食事を共にしたり、週末に外出に誘ってくれたり、生活に減り張りを与えてくれたと思う。また体調を崩したり、何か問題が起きた時には、すぐに助けてくれたりと、報告者の留学生活にとって、彼らは大変心強い存在であった。

また大学の友人とは別に、各地での調査を通して、たくさんの研究者やインフォーマントと知り合えたことも、この留学での大きな成果と言える。こうした多くの出会いに感謝をし、今後もこの関係を大切にしていきたいと思う。最後に、このような貴重な機会を与えて下さった松下幸之助記念財団のみなさまに、心より感謝申し上げますとともに、今後の研究人生においても一層の精進を重ねてまいる所存です。本当にありがとうございます。

## 今後の社会貢献

今後の社会貢献としてまず考えられることは、博士論文を完成させることである。それを社会に公表することで、学術的分野への貢献が可能である。しかし、学術論文という特殊な媒体では、広く社会に貢献することは難しい。昨今のイスラーム関連の報道や、インドネシアで言えば、未だ記憶に新しい2000年代にバリ島とジャカルタで起きたテロ事件により、「イスラーム」、もしくは「インドネシア・ムスリム」という言葉を聞いて、「好戦的」、「暴力的」、「危険」といったイメージを抱く日本人は、少なくないだろう。この留学で得た経験や自身の研究テーマを生かし、こうした偏向的でネガティブな「イスラーム」に対するイメージが、少しでも変わるような書物や情報を、今後日本社会に発信していきたい。

インドネシア社会に対しても、学術的な貢献だけではなく、これまで身につけたインドネシア語で、日本の技術や彼らにとって有益な情報を伝えていきたいと思う。具体的な活動として留学中から度々考えていることは、文献の保存・修復に関する取り組みである。インドネシアでは、国立図書館といえども、文献の保存・修復が適切に行われているとは言い難い状況である。今後の研究活動と並行して、こうした活動に取り組み、これまでお世話になったインドネシア社会に対して、微力ながらも恩返しをしていきたいと強く思う。



ジャカルタ、インドネシア国立図書館 7 階(雑誌所蔵室)にて。  
司書の方々と報告者(左から三人目)。



ジョグジャカルタ、ガジヤマダ大学歴史学科の大学院生と  
お世話になった同大学教授 Dr. Sri Margana(右から二人目)。



スラバヤ、アンペルモスク。  
同モスクで、ミアイ設立の宣言が行われた。  
敷地内には、マス・マンスールのお墓が現在も残っている。